



風景としてのみち

~MUSE たかつき を事例として~

高橋靖一郎*1

1.はじめに

「みち」は、暮らしや経済を支える機能的な動線であるとともに、暮らしが表出する空間軸であり、歴史を伝え文化を育む時間軸である。それゆえに「みち」のデザインは、計画条件に加えて、地域の自然環境や人文環境、景観構成要素を活かすことが求められる。近年は、生態環境を支えるための雨水浸透や生物多様性に配慮した樹種構成など配慮すべき点も多い。

これに対して、土木の技術力をベースとして、ランドスケープデザインの視点や技術を活かすことは有効である。地域固有の風景の創造は、まちのブランド力を高め、地域活性化にも寄与する。事例として取り上げる『MUSE たかつき』では、計画から設計、施工、監理まで、一貫したデザインコンセプトにもとづいて、多様なエレメントの関係性とデザインについて詳細な検討がなされた。そのプロセスやポイントを報告し、土木の潜在的なランドスケープデザインの可能性について話題提供する。

2.計画概要

対象地はJR高槻駅北東に位置し、既存商業施設と隣接する工場跡地である。東側は駅から北に伸びる上宮天満宮の参道、北側は旧西国街道である古曽部天神線に接し、南側はJR京都線が通る。平成16年5月に高槻市により都市再開発特別措置法にもとづく都市再生緊急整備地域に指定されている。土地区画整理事業は、組合施行による一括業務代行方式により、基盤整備と多様な事業者の建築工事が同時に進められたことに特徴がある。このことがトータルなデザインマネジメントを可能にした。全体街区は、3つのゾーンと5つの軸（街路、デッキ）で構成されている。

事業概要は以下である。

事業名称：北部大阪都市計画事業

JR高槻駅北東土地区画整理事業

施工者：高槻市JR高槻駅北東土地区画整理組合

施工区域：高槻市白梅町他

地区面積：約9.25ha

施工期間：平成20年7月31日～平成25年3月

3. まちとのつながり

まちとのつながりを視覚的に意識してもらうために、上宮天満宮の参道に合致し、城下町の条里を形成していた南北軸を舗装パターンアクセントとした。街区やみちの繋ぎ目に配置された象徴的なプラザでは、樹木、照明、ツリサークル等がパターンに合わせて一体にデザインされている。プラザ2は、参道と旧西国街道の交点にあたり、例祭では植木市で賑わう。商業施設の出入口にもあたることから、樹下に平面的な広がり開放性を持たせ、通行の利便性と安全性とともに、祭事の活用に対するゆとりを確保した。



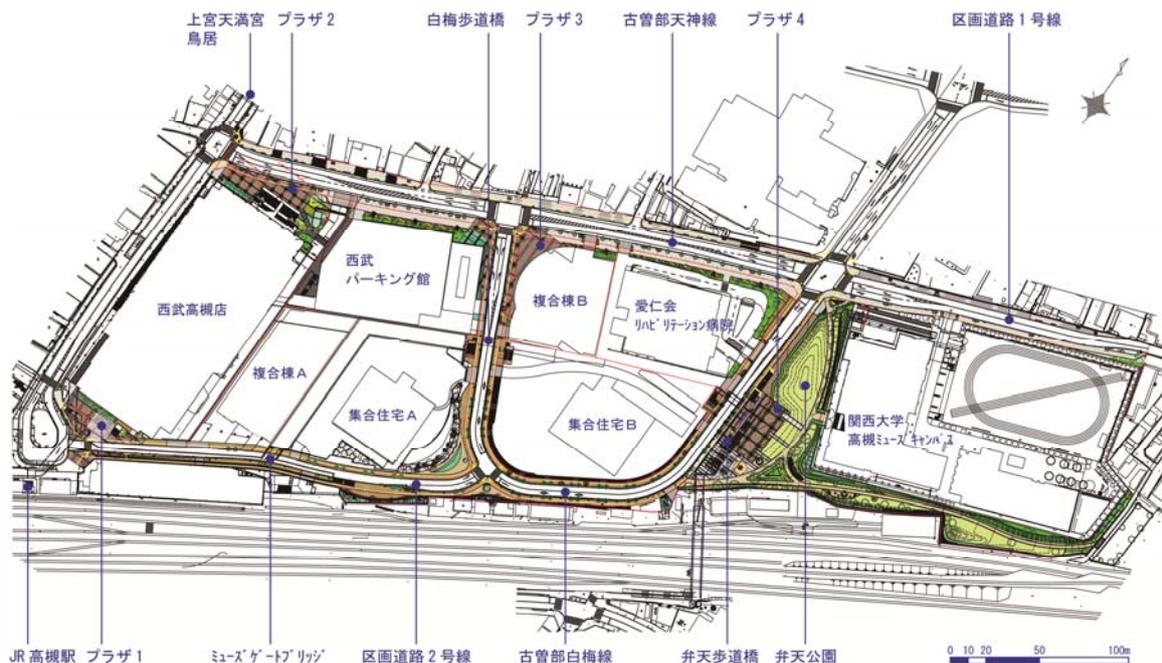
写真-1 プラザ2

4. 官民のつながり

本件では、民間開発がインフラ整備と並行して進められたことから、公共空間にもデザインの質が求められた。まちを特徴付ける街路デザインについては、官地と民地の舗装材とデザインの関連性に配慮した。ボーダーパターンは、街路樹や街灯の配置と関連してリズムを刻み、縦方向に見ると間隔が変化して奥行きを感じさせる。微妙な色やパターンの違いは利用者の意識に働きかけて、スピードの緩和や利用動線の区分に寄与しているように感じられる。古曽部天神線にはLED照明を敷設し、夜間の修景とともに、災害時に公園に誘導する役割を持たせた。



写真-2 古曽部天神線



全体計画平面図

5.安全のつながり

舗装の施工に関してはイモ目地として、面的な広がりを感じられるようにした。車両動線は強度を確保するために材料の規格を小さくし、注意を喚起するために濃色とした。しかし、供用後にタイヤの旋回による歪みが生じ、馬目地にすることで解決が図られた。これは強度（用）とデザイン（景）を支える技術の実証となり、以後、適所で併用することとした。

6.緑のつながり

街路において、植栽は重要な景観構成要素である。緑化基準を満たす緑地が表出することで、海外と比較しても、日本の街路景観は緑量が豊かで変化に富んでいる。本件では、各事業者の接道緑地をトータルにコーディネートすることにより、街路を行き交う利用者に対して、距離を活かした変化のある植栽デザインを計画することができた。古曾部天神線の民地側の植栽帯では、プラザの軸に合わせて配植に変化を持たせた。これにより、地域の歴史的な文脈をデザインに翻訳し、四季の変化をもたらすことができた。各街路でも主要な樹種構成に変化を持たせ、春と秋を中心に季節の彩りが楽しめる配慮をしている。

また、プラザには常緑樹による緑量を確保することで、一年を通じて「みち」に緑の焦点が形成されるように工夫した。



写真-3 古曾部天神線 民地側植栽帯

7.移動と休息のつながり

古曾部天神線沿いには、事業者の理解を得て、民地内に休息スペースを設けた。建物北側だが、緑に囲まれ夏は木陰となり、病院への通院者、高齢者、親子連れに安らぎ時間を提供する。また、直線的なまちなみのアクセントともなり、イベントを補完する役割（マーケットプレイス、パフォーマンスステージ）を担う。安全や管理の課題はあるとしても、みちが「座る」という機能を備えることは、福祉や地域コミュニティ形成の観点からも大切なテーマになると思われる。



写真-4 古曾部白梅線 JR 境界部植栽帯



写真-5 古曾部天神線 街路樹、民地側植栽帯

8.あかりのつながり

街路照明は住宅地に接していることもあり、暖かみのある暖色系の明かりを基調とした。また、街路の幅員に合わせて街灯の高さを変え、あかりにスケール感を持たせている。プラザでは、常緑樹の幹を照らすことで、夜の焦点となるあかりの木立を形成している。



写真-6 古曽部天神線 夜景

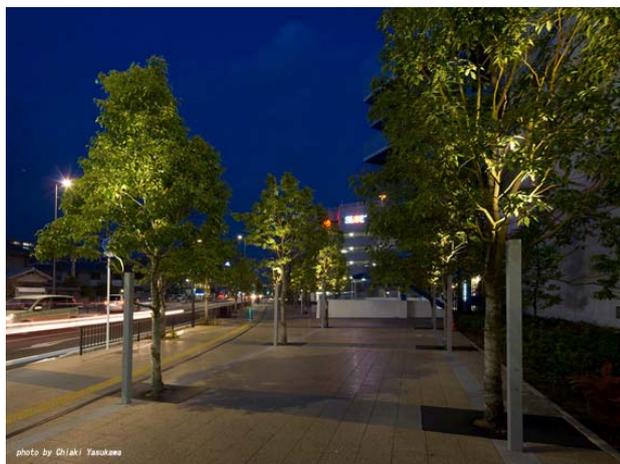


写真-7 プラザ2 夜景

9.もうひとつのみち

地上のみちのほかに、ペDESTリアンデッキが駅や商業施設、病院、学校、公園、JR 跨線橋をつなぎ、住民は車道と交差せずにまちを回遊することができる。ペDESTリアンデッキもまちの顔としてデザインされ、柱や屋根は軽やかな印象を持たせ、開放性が感じさせる。暮らしの主動線としてデッキ上の広場と連絡し、公園ではプラザに

接続する。橋上からは北摂山系をのぞむことができ、公園の木々が成長すれば、緑の上を歩いているかのような風景を楽しむことが期待される。



写真-8 ペDESTリアンデッキ

10.美しいランドスケープの創造に向けて

土木は大きなスケールを扱い、機能性、安全性、経済性を重視する。その技術を空間に活かし、人々に恩恵をもたらす術=テクニックの一つがデザインであろう。それゆえに、「～風」というイメージを固定させるのではなく、その場の様相=「らしさ」を慎重に見極める姿勢と、適切な技術を用いて空間化を図る柔軟な思考が大切である。ランドスケープデザインは、広域のつながりを読み解く有効な手掛かりを提供しうる。

土木は強度を持った、しなやかな、美しい風景をつくることのできる職能である。今後は、命をつなぐ生態系への配慮や、ストックを活かした暮らしの再構築に貢献することが求められる。

人が歩く「みち」からランドスケープが始まるとすれば、ちょっとした工夫と遊び心で、その空間は豊かで安らぐものとなる。美しいランドスケープの創造に向けて、土木デザインの活躍が期待される。

*1 株式会社 LPD 取締役 正会員(土木学会)